

れた 12 例では TAE 後約 1 週間で FT₃ は有意に低下し、他方、rT₃ と TSH は有意に上昇、FT₄ は著変なく、FT₃ と rT₃ との間の reciprocal な関係が示唆された。

8. I-131 MIBG による副腎描出の検討

塚本江利子 伊藤 和夫 中駄 邦博
加藤千恵次 永尾 一彦 古舘 正従

(北大・核)

I-131 MIBG の副腎髓質の描出について検討した。対象は、正常副腎をもつ 43 例と副腎髓質過形成の 1 例である。静注後 72 時間のイメージ上、視覚的に副腎の描出を Grade 0 から Grade 3 までに分けて評価したが、正常副腎は 43 例中 17 例 (37.4%) に Grade 1 または Grade 2 の描出を認め、副腎過形成では Grade 2 の描出を認めた。CT で深さを測定し得た 9 例で、コンピュータ画面上に ROI をとり、算出された正常の左副腎の %Uptake は、Mean ± 2 SD で 0.048 ± 0.027% であった。これに対し、副腎髓質過形成の %Uptake は、0.055% と正常副腎と差がなく、イメージ上、これらを鑑別するのは難しいと思われた。また、副腎描出に影響を与える因子について調べたが、正常副腎の描出される症例では、そうでない症例に対し、尿中エピネフリンが有意に高かった。

9. ¹³¹I-MIBG にて集積を示さなかった Paraganglioma の一例

吉岡 邦浩 加藤 邦彦 広瀬 敦男
高橋 恒男 柳澤 融 (岩手医大・放)

¹³¹I-MIBG シンチグラフィで集積を示さなかった左側頭下窩のノルアドレナリン分泌性の paraganglioma の 1 例を経験した。

¹³¹I-MIBG が施行された頭頸部の paraganglioma は、われわれが知る限りでは、9 例の報告がある。そのうち集積がみられたものは 6 例であった。また、この 9 例をカテコールアミンの分泌性の有無で分類すると、非分泌性のものは 4 例で、その全てに集積がみられたのに対して、分泌性のものは 5 例中 2 例にしか集積がみられず、分泌性の paraganglioma の方が陽性率が低いという興味ある傾向がみられた。この原因としては、現在までに

考えられているもののうち、腫瘍のカテコールアミンの rapid turnover とノルアドレナリンとの取り込みの競合が推測された。また、頭頸部の paraganglia には、種々のエステラーゼや neuropeptide が存在するため、これらも集積低下の一因となり得ると思われた。

10. 褐色細胞腫の診断における I-131 MIBG シンチの臨床的意義

樋口 正一 小田野幾雄 清野 泰之
木村 元政 酒井 邦夫 (新潟大・放)
武田 正之 (同・泌)

昭和 60 年 1 月から 63 年 4 月までの 3 年 3 か月間に褐色細胞腫が疑われた 54 例に I-131 MIBG シンチを施行した。そのうち組織学的に褐色細胞腫の確定診断が得られたものは 15 例 (16 病巣) があった。これらのうち I-131 MIBG シンチで有意な集積がみられたものは、良性褐色細胞腫の副腎原発では 9 病巣中 7 病巣、副腎外原発では 4 病巣中 3 病巣であった。また、悪性褐色細胞腫の 3 原発巣には全て集積がみられた。この結果、検出率は 81% であった。CT では全病巣が描出されており、病変の検出には CT が優れていたが、I-131 MIBG では偽陽性例はなく、その疾患特異性は 100% で、褐色細胞腫の診断に有用であった。

11. 心筋梗塞後心室瘤症例の血栓検索の検討——¹¹¹In-oxine 血栓シンチグラフィを用いて——

津田 隆俊 久保田昌宏 高橋貞一郎
森田 和夫 (札幌医大・放)

心筋梗塞後心室瘤を持つ 17 例を対象に心腔内血栓検索を行い、他の方法との比較において、その特性を検討した。対象 17 例のうち、血栓 scan で陽性の 8 case は心エコー法 (UCG) または左室造影法 (LVG) にても左室内血栓を認め、6 case は UCG または LVG にて陽性で、血小板 scan では陰性であった。これらのことから、血小板 scan では、現在成育を続ける活性化血栓のみを検出し得、器質化血栓では陽性となり得ないことが考えられた。左室内血栓の機序については種々の説がとなえられ、一定の見解はない。血小板 scan で positive 群と negative 群で、LVEF と発作から同検査までの期間に関